

漢法苞徳塾資料	No. 275
区分	論説
タイトル	未来医学としてのパラダイムのための課題
著者	八木素萌
作成日	1992.12

1. 人間機械論の系譜と論理実証主義の投げ掛けているもの。この現代医学の理論・研究方法論・思想は、根本的な点において明らかに行き詰まっている。これを重視している指導的医学者は少なくない。この袋小道から抜け出す道が模索されている。その一環として世界各地の伝統医学や治療術に対する興味が表明されている。その他にも、リズム・ $1/f$ ・フラクタル・カタストロフ・カオス・ファジー・構造構成の「形の科学」など、理論的に新しく展開されている視点がある。これらの視点と、人間機械論の視点との間の、統合された理論は、まだ見られないが、注目して置くべきもののようである。

2. 「生氣論」の系譜も、その内容は多彩である。漢法医学（その生命観・疾病観・治療論）も、「生氣論」的な医学として位置付けられている。ヒポクラテス・ガレノスの医学も、ここに分類されている。

漢法医学の「生氣論」は、「民用五材」としての「木火土金水」を、五元素論として還元できるものではない。陰陽五行論は運氣論を持っているのであり、臓象論と経絡説を天人合一思想において融合せしめた医学として貫徹している、そういう意味での「生氣論」なのである。

3. 現代の医療が直面している問題には、

イ：科学万能の期待や将来への楽観主義が破綻しそうな深刻な不安の問題がある、(院内感染・精神神経疾患の増大・癌や免疫性疾患など難治性疾患の増大・エイズ他の未知の疾病の発生・生活スタイル病と表現される成人病などと呼ばれる疾病の増加)。

ロ：医療体制の財政的破綻の危険性と包括し切れない問題が医療制度を揺るがし始めている問題（高額であり然も大型にもなっていくCTスキャンやMNRスキャンや各種の診療用機器の大量な普及・薬害に象徴的な医原病の問題と薬価負担の増加など）。

ハ：医療の主流的な臨床思想の退廃腐敗の問題（ヒヒの肝臓移植〈新しい免疫抑制剤の実験の要素を強く感じられる〉ほかの臓器移植問題にからんで起こっている、手続きを省略して早まった脳死判定〈臓器移植に逸って死の判定問題の重要性を軽んじた〉・姉妹の関係であったが腎臓移植後まもなく患者は組織不適合の不全症で死亡〈組織適合の調査や輸血の適合判定などの軽率〉・分科別の投薬により結果的に超大量投薬となる結果薬毒が発生〈老人痴呆の発生－催眠鎮静剤の副作用発生、総合判断により服用中の薬品の大幅整理が痴呆を治癒した例など〉）

ニ：研究思想の行き詰まり（カオス、カタストロフ、フラクタル、ファジーなど新理論の運用には、まだかなり大きい距たりが見られる、実験的に純粹条件を求める余り生命活動中の姿から距離がある状態を追求している、免疫機能は生活条件や心理的条件と深刻に関連している事が漸く公式に論じられるようになったが、こういう面を組み込んだ研究や実験は不能なものである）その他。

4. 過去の歴史において転換期を示唆しているように、例えばペスト、コレラが社会を揺るがした。当時の治療医学術の手に負えない疾病が発生している。いま、「エイズ」や「バイロイドによるかも知れない疾患」や「癌」など「極度に難治な疾病」が現代社会を揺るがしている。

これに対応できる医学が求められている。それは、「人間機械論のパラダイム」が無力に感じられている事を示す『魔弾の効用を超えて』（ディクソン）のような著作に「予感」されている。

このように、新しいパラダイムによる医学が模索されている。この点もつとも、期待されているものが東洋医学のパラダイムであると言ってよいだろう。

こう言う期待を反映しているのが、「日本経絡学会」の「第20回学術大会」における会頭特別講演での、昭和大学学長・安西医学博士の「…人間機械論・科学主義は、癌やエイズのような生命の根本的存在に関わるような病気にはテコずっている、生氣論の医学としての東洋医学には、このような問題に対して大きく期待して良いものがあるように思う…」（八木の聴講メモによる）と言う発言であると思う。

藤田六朗博士の、「五行説の周期律的考察」はじめ『藤田六朗論考集・第4集—五行循環』に記載されているような研究や、石井陶泊先生の発生学の知識による経絡の研究の如きもの等に見られる事であるが、また、リズムやカオスやフラクタルやなどの現代科学の転換を担いつつある理論を、包摂することができる質を持っているのが「陰陽五行論」であり「漢法医学の医哲学」であると言ってよいものと思う。

「…カオス研究の歴史は、実は古い。が、『新しい科学』として注目され出したのは、七〇年代後半からだろう。その草創期から理論的な研究に挑み、世界的に注目されているのが、東大教養学部基礎科学科助教授の金子邦彦さんである。…」（科学朝日12月号—p.76）の金子さんが「高校生のころ荘子が好きでよく読みました。カオスをやり始めてから荘子の混沌の話に結びつく感じがしてちょっと心が踊りましたよ。」（上記号のp.79）とのことである。

漢法医学は今日では老荘の頃よりも精密になり深化した論としての「陰陽五行論」によって構成されている。

5. 「陰陽五行論」は、ヒトの知的達成のあらゆる分野の全事象を、陰陽と五行の概念で把らえる事ができる所の、認識方法論でもある。また、研究方法論ともなっている。また、論理や思考を展開して行く為の、論理学と言うことが出来る。それ故に、「日本経絡学会 20 回学術大会」での「安西博士」の期待は、人智の新しい達成を、この哲学（世界認識・認識研究方法論・思考展開論理方法論などとしてのもの）によって、全面的に照射して組み替え構成してやる仕事が、具体的に達成される事を求めている。これは、漢法医学の研究者に巨大な荷物を担う覚悟と力量を要請していることである。

6. 導尿や浣腸は、既に『金匱要略』に記述されており、『医宗金鑑』（呉謙・1749 刊）には、既にコルセット、脊柱保持装具、膝関節保護装具などの図が描かれ、肩関節や股関節や腕関節や肘関節、手根骨や足根骨や手足の指などの損傷に対する措置が、それぞれに適当な固定して保護する治療的措置を、内服薬そして貼付薬と共に記述しており、按摩治療法（マッサージ・運動法）等も記述している。

A D200 前位には華佗が麻酔して開腹手術した記録があり、A D465 頃には徐文伯が「婦人瘕」（子宮癌？）治療の専門書を書いている。縊死や溺死を鍼灸治療で蘇生させた記述、死胎を排出せしめる用穴や、逆子横子や産難に対する用穴など、墮胎せしめる用穴などは、既に『鍼灸資生経』（王執中・A D1220 成書）や『鍼灸聚英』（明・高武・A D1529 成書）などに記述されている。

7. 中国においては、古代の刑罰の記録や、風俗を記述しているとされる『金瓶梅』などの記述には、開腹術や、手足切除の大型の手術や、臓器移植や輸血などが、行なわれていたと思われる節が強い、とされている。系統的な調査が希まれる。

8. 少なくとも、今日に残されている漢法医学には、これらの大型の手術などは姿を見せない、外科的措置が残っていたのは鍼術の一環とされていた眼科の白内障・緑内障の手術や、アザやイボの燻鍼による焼却治療の程度である。何故、此のようになったのか？冷静に厳しい調査検討がなされるべきである。

「周礼」「史記・扁鵲倉公列伝」などから判かるように、医師は不治であるか治癒するかを辨別する能力が厳しく要求されていた。予後の生死の判別に対する医師への要求（医師にとっては失敗は投獄や死刑のように自分の命が賭っていた・毎年一度臨床成績が評価されて給与が決定された・など）が、「上工は十中に九を全し・中工は十中に八を全し・下工は十中に六を全す…」（十三難）のように評され、反面では「…氣を得ざれば 男は外に女は内に与えて 氣を得られず 是れを十死の不治と為すものなり」（七十八難）と記述されているように手を尽くすことも厳しく要求されていた。従って、まだ当時には、免疫抑制剤は無かったし、血液型論＝組織適合性論は見られ無いようであるが、術語の予後に関して見極めががついていたし、侵襲性の激しい処置に取り代わる治法が採用されて行った、と見なせる節がある。

我々の狭い経験では、湯液治療や鍼灸治療の結果、驚くべき効果が上がっている。それは、侵襲性が激しい外科的な処置を必要としているかどうかを、深刻に再検討しなければならないと思わせるものがある。

絶えず系統的に十分に信頼できる効果が発揮できるような、学術水準を作り出せるような体制を建設する必要があるが、漢法医学を担うものの養成と訓練の上においてもある。

モラルの高い医療システムの為に、大衆的なレベルでの新たなる基調を獲得するための運動が不可避であろう。

1992.11.25 以上